

本の

HON-NO-HIROBA

ひろば

ISSN 0286-7001

一般財団法人キリスト教文書センター

1957年7月17日第三種郵便物認可

2025年1月1日発行(毎月一回1日発行)第805号

出会い・本・人

対立する項目を調停すること

井筒俊彦の著作からの学び 阿部仲麻呂

特集シリーズの三冊！

聖書とは何かを考えるなら、この三冊！ 山崎ランサム和彦

エッセイ

《皆川達夫セレクション》全三巻の刊行に寄せて 樋口隆一

本・批評と紹介

柏木哲夫 編 信仰生活ガイド

苦しみの意味 川上直哉

ニーナ・スミット 著／日本聖書協会 訳

日々の黙想 366日で読む聖書 永井信義

M・Z・ブレットラー、D・J・ハリントン、P・エンス 著／魯 恩碩 訳

聖書学と信仰者 並木浩一

藤原佐和子 著 現代エキメニカル運動史 西原廉太

袴田康裕 著 改革教会の信条と展開 澤 正幸

W・J・エイブラハム 著／加納和寛、赤松真希 訳

メソジスト入門 藤本 満

望月麻生 著 たからさがし 上田亜樹子

◆ 近刊情報

◆ 書店案内

善き力

ボンヘッファーを描き出す12章

イルゼ・テート著／岡野彩子訳
誰よりボンヘッファーのテキストに通暁する碩学が、12の視点から語った刺激的論考。彼の信仰と神学の世界がより近くなる。

◆四六判・定価3960円



聖書学と信仰者

信仰者は批判的聖書学とどう向き合うべきか

M・ブレットラー、D・ハリントン、P・エンズ著／魯恩碩訳
ユダヤ教、カトリック、プロテスタントの3人の著名な聖書学者が、相互の立場と方法を論じ合った白熱討論！

◆A5判・定価2970円



ロゴセラピーのレッスン 21の知恵

P・ロイ、M・ランメル著／赤坂桃子訳
70年にわたり内村研究を主導してきた著者が、「なぜ最初の結婚は破綻したのか」「天皇をどうみたか」など、更なる解明を要する24の「謎」を取り上げ、その人格と思想に迫る。

12月23日 ◆B6変型判・定価1650円

ロゴセラピー

人間への限らない畏敬に基づく心理療法

エリーザベト・ルーカス著／草野智洋・徳永繁子訳

「生きる意味」の発見を支えることによって心の病の治癒に取り組む。その基礎概念から実践技法まで、懇切に解説。牧会者必読！

A5判・定価3300円



ロゴセラピーと物語

大反響

勝田茅生著 フランクルが教える〈意味の人間学〉

【著者はNHK「こころの時代」講師】昔話や寓話を例にとり、ロゴセラピーの核心メッセージを平易に解説する。3刷

小B6判・定価1760円



ロゴセラピーのエッセンス

18の基本概念

◆B6変型判・定価2090円

フランクル著／赤坂桃子訳

『夜と霧』英語版に著者が付けた解説。18の基本概念を著者自身が解説した、ロゴセラピーへのまたない入門書。

2025年 渡邊禎雄 版画カレンダー

聖家族のエジプト逃避を描いた1970年の傑作。紛争と難民の絶えない世界に平和を祈って、この絵を選びました。

* 100枚から教会・学校・会社等の名入れを承ります。

◆定価 660円





対立する項目を調停すること

井筒俊彦の著作からの学び

阿部仲麻呂

1989年に、20歳だった筆者は、しきりに井筒俊彦の著作を読み返した。特に『コスモスとアンチコスモス』（岩波書店、1989年初版）を好んで読み深めた。初版から30年の歳月を経た同著は2019年になると岩波文庫版として新たに刊行されたので、50歳だった筆者はすかさず本屋で飛びつくように購入した。常にカバンにしのばせて持ち歩いており、いまでも出張の際の飛行機の待ち時間などにラウンジで丁寧に味わって読み続ける。

総計36年目に突入しても、いまだに輝きを放つ本に出合えたということは著者の井筒氏との紙面上の交流が続いていることの証左である。井筒氏の思索の魅力は対立する項目を調停する絶妙な手立てを示すことにある。『コスモスとアンチコスモス』という表題からして、調和と非調和とをつつみこむ場の考察を読者にうながす。その思考法は同著の最後尾を飾る「禪的意識のフィールド構造」という論考の内容にも顕著に表明されている。

る。この現実世界と仏の悟りの充実した空とを調停する場がひらけてくる気高いひとときを活写する思索の言語化の奇跡。まるで輝ける暗闇のように底知れぬ真実が顕れる。

さて、現代世界は格差問題のオンパレード。経済格差、性別格差、身分格差、権力格差、国家間格差、軍事格差、その他、数え挙げたらきりが無い。しかも家族も職場も修復不可能な感情のもつれで決裂の現場と化す。そうなると私たちは解決不能の難問の泥沼に沈み込むだけで、為すすべもなくながくのみに救いようがない。対立する項目を調停することに人生を賭けた井筒氏の情熱を見直すことが、まさに一縷の希望のいのち綱。筆者は「人見知り」という決定的な限界をかかえるがゆえに、対立する項目を調停する方法を無意識のうちに探し求める毎日を重ねてきた。それで井筒氏の思索の魅力に同調できた。本能的に真実の端緒をつかんだことだけは不幸中の幸い。

（あべ・なかまろ＝日本カトリック神学院教授）



▼シリーズ この三冊！

聖書とは何かを考えるなら、この三冊！

山崎ランサム和彦

(やまざき ランサム・かずひこ)
…聖契神学校教務主任)

聖書は言うまでもなくキリスト教の聖典、そして正典です。どのような伝統に属するにしても、キリスト教徒は何らかの意味で聖書を權威ある「神の言葉」と受け取ってきました。中でも宗教改革以来の「聖書のみ (sola scriptura)」の伝統に立つプロテスタント教会においては、聖書はクリスチャンの信仰と実践における唯一で最終的な權威として、中心的な位置を占めています。

これほどに重要視されている聖書で

すが、いざその聖書をどのように解釈し、現代の複雑な状況に適用するのか、という段になると、キリスト教会のコンセンサスは途端に失われ、混乱を極めているのが現実です。プロテスタントは聖書を唯一の最終的權威としてしまったがために、多様な聖書解釈のどれが正しいかを判定するための共通の基準を自ら放棄したとも言えます。この『聖書のみ』のジレンマ」は、宗教改革から五百年以上を経た現在も未解決のまま残されています。そして教会

が現在直面している喫緊の課題に向き合おうとするときに、対立する意見を持つ人々の議論が平行線をたどるような光景が繰り返されています。より保守的な人々は聖書テキストの表面的な文言をそのまま現代の状況に当てはめようとして、様々な場面で軋轢を生み出しています（この点で現在訳者も所属する福音派の聖書観は時に「聖書崇拜 (bibliolaty)」と揶揄されることがあります）。反対に、一部の人々は、聖書の大部分は現代に合わない「時代遅れ」のものとして捨て去ろうとします。私見では、このような論争の多くは、単なる聖書解釈の違いに起因するものではなく、より根底にある聖書論——聖書はどのような書物であり、どう機能するのか——の違いによるものです。聖書がどのような書物であるかが分かなければ、それをどう読めば（解釈すれば）良いのかも分かりません。聖

書が「神の言葉」であると言うだけでは不十分です。どのような意味で、聖書が「神の言葉」であるかが問われなければなりません。

日本における福音派でも、古くは一九八〇年代に聖書論に関する論争が起こり、日本プロテスタント聖書信仰同盟（JPC）がアメリカの福音派を中心に採択された「聖書の無誤性に関するシカゴ声明」（一九七八年）の影響を強く受けた「聖書の權威に関する宣言」を一九八七年に採択する一方で、榊原康夫、村瀬俊夫、中澤啓介といった、より柔軟な聖書論を持つ優秀な神学者たちが福音派の主流から離れて行きました。それ以降日本の福音派では聖書論に関する議論が停滞していましたが、ここ十年ほどの間に再び、この問題が活発に議論されるようになってきました。二十一世紀になってからの聖書論への関心の高まりは、複雑に変

化する時代の現実に対応していくために、従来の福音派の聖書論（たとえば聖書の無誤性の主張）では対応しきれなくなっているとの認識が、若い世代を中心に広まりつつあるしるしかもしれません。それを反映して、福音派の中でもより多様な聖書論の理解が見られるようになってきています（もちろん、昔ながらの聖書論を大切にしている人々もいます）。

ここでは、最近日本語で出版されたものを中心に、信仰者にとって聖書とは何かを考える上で、筆者の参考となった本を紹介させていただきます。福音派に特化した視点から書かれているものもありますが、ご理解いただきたいと思います。いかなる解釈も読者が置かれている特定の歴史的コンテクストからくる制約から完全に自由になることはできない、ということもまた、聖書解釈における原則です。のみなら

ず、ドナルド・トランプが返り咲いた今年のアメリカ大統領選挙でも明らかになったように、特にアメリカの福音派は世界情勢にも少なからぬ影響を与えていますので、福音派の聖書論にどのような動きがあるのかについて、福音派以外の方々にも関心を寄せていただけるのではないかと考えています。

マーク・ツヴィ・ブレットラー、ダニエル・J・ハリントン SJ、ピーター・エンス『聖書学と信仰者 信仰者は批判的聖書学とどう向き合うべきか』

聖書を構成する各書巻は具体的な歴史的状况の中で、人間の著者（あるいは共同体）を通して書かれ、編纂された。最終的に正典として成立してきました。したがって、聖書を「神の言葉」と受け取る信仰者であったとしても、聖書の歴史的・人間的側面を無視することはできません。聖書がどういう書であ

るかを理解しようとすれば、各文書の歴史的成立過程やその背後に存在した歴史的状況、そしてオリジナルの歴史的コンテキストにおいて各テキストが何を意味していたのかの研究は欠かせません。本書はユダヤ教、ローマ・カトリック、プロテスタントという、異なる宗教的背景を持ちながら、共に聖書の歴史的・批判的研究に献身する聖書学者による論集です。各著者のエッセイの後に残りの二人からの応答が付けられるという構成になっています。著者によって批判的聖書学への関わり方は微妙に違いますが、共通して語られているのは「信仰と批判的聖書学は両立する」ということです。

N・T・ライト『聖書と神の権威 聖書はどういう意味で「神の言葉」であるのか』

世界的に著名な英国の新約聖書学者、

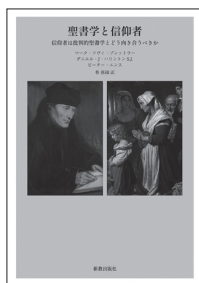
N・T・ライトの聖書論です。彼は、聖書は道徳のルールブックでもなければ真理の情報の貯蔵庫でもなく、神についての（未完の）物語であると主張します。しかし、物語が権威を持つとは、いったいどういう意味でしょうか？ 彼によると、それは信仰者に神の物語の登場人物としてのアイデンティティを与え、現在進行中の神のドラマにおいて、これまでの物語の展開に忠実であり、かつ神が指し示す終末のヴィジョンに向かって歩んでいくような適切なパフォーマンスを求める、ということなのです。そこでは、単に断片的な聖書箇所を証拠聖句的に当てはめるようなナイーヴ読み方は用をなしません。教会は、聖書が示す軌跡に沿って、「今・ここ」にふさわしいパフォーマンスを創造的に考えていかなければならないのです。

記者でもある私はもちろん、ライト

の基本的な聖書論に賛同しますが、彼が巻末に付けているケース・スタディーには同意できない部分もあります。それについては「訳者あとがき」でごく簡単に触れていますが、より詳しくは拙ブログ「鏡を通して」<https://1co1312.wordpress.com/>でお読みいただくことができます。

藤本満『聖書信仰 その歴史と可能性』

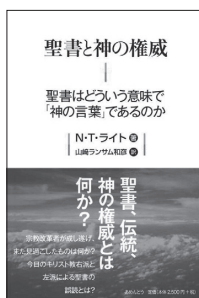
本書はちょうど一〇年前の二〇一四年十一月に持たれた日本福音主義神学会全国研究会議で行われた講演が元になっています。ここで藤本氏は福音主義の聖書論（日本ではしばしば「聖書信仰」という曖昧なスローガンで表明されます）のルーツを歴史的に丁寧にとどけていきます。現代の日本の福音派で広く受け入れられている「聖書信仰」は、「シカゴ声明」的な「真理の啓示」としての聖書を強調するタイプ



『聖書学と信仰者』 ——信仰者は批判的に聖書 学とどう向き合うべきか』

マーク・ツウィ・ブレッ
トラー、ダニエル・J・
ハリントン SJ、ピーター・
エンス：著
魯恩碩：訳
新教出版社
2024 年刊
A5 判 219 頁
2,970 円

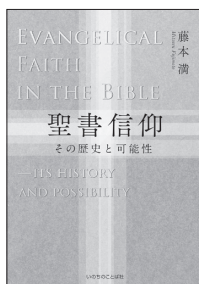
の聖書論です。そこからさらに歴史を
遡っていくと、より救済論的な、「読
む者を救いに導く聖書の力」を強調す
る流れの福音主義もあったことを藤本
氏は明らかにし、本来福音主義が持つ
ていた豊かな多様性を内包する「聖書
信仰」の回復を訴えています。
本書で藤本氏が提示した福音主義的
聖書論は、氏の近刊である『LGBT



『聖書と神の権威』 ——聖書はどういう意味で 「神の言葉」であるのか』

N・T・ライト：著
山崎ランサム和彦：訳
あめんどう
2024 年刊
四六判 280 頁
2,750 円

Q 聖書はそう言っているのか』（イ
クススエブックス、二〇二四年）にお
いて具体的な結果が見られます。そこ
では性的少数者を排除し断罪するため
に伝統的に用いられてきた聖書箇所を
一つ一つ吟味し、当時の歴史的背景も
考慮しながら釈義がなされ、同時に従
来の福音派の聖書論の見直しも主張さ
れています。



『聖書信仰——その歴史 と可能性』

藤本満：著
いのちのことば社
2015 年刊
四六判 411 頁
3,080 円

以上、私の個人的な立ち位置と関心
に基づくごく狭い視点からではありま
すが、いくつかの書物を紹介させてい
ただきました。福音派・主流派、ある
いはプロテスタントであるとないとを
問わず、聖書を神の言葉と信じるすべ
てのキリスト者は、「聖書とは何か」
という問いに絶えず向き合っていかな
ければならないと感じています。

音楽も人を救うことができる

《皆川達夫セレクション》全三巻の刊行に寄せて

樋口隆一

(ひぐち・りゅういち、明治学院大学名誉教授、音楽学者、指揮者)

皆川達夫先生が九二歳で帰天されたのは、二〇二〇年四月十九日のことだった。三月二十九日に、三十二年間続けられてきたNHKラジオ第一放送「音楽の泉」の最終回を、バッハのガヴオットとともに「ごきげんよう、さようなら」と締めくくられたばかりのことだった。

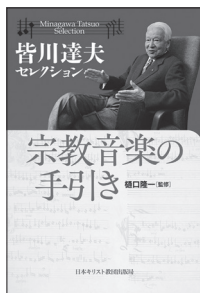
皆川先生はそれ以前にも、一九六五年～八五年の二十年間、服部幸三先生とお二人でNHK・FMの人気番組だった「バロック音楽の楽しみ」を担当

されている。これらの番組を通じて、バロック音楽のみならず、中世・ルネサンス音楽の楽しみが、日本の音楽ファンに伝えられたと言っても過言ではない。

先生の帰天から二年を経た二〇二二年四月、多数の資料が「皆川達夫コレクション」として、明治学院大学図書館付属遠山一行記念日本近代音楽館に寄贈された。するとある日、音楽司書からメールが届いた。樋口に見て欲しいというご指示があるという。そこで

ある日、それらの資料を拝見すると、先生のライフワークとなったキリシタン音楽関係の資料のほかに、晩年の先生が新聞や雑誌に寄稿された記事のコピーが、多数のファイルに整理されたものがあつた。拝読するとそれぞれに意義深く、興味深いものばかりだった。

晩年の先生は、NHKの放送と並行してライフワークとなった『洋楽渡来考——キリシタン音楽の栄光と挫折』（日本キリスト教団出版局、二〇〇四年）をはじめとするキリシタン音楽関係の浩瀚な書物の執筆と出版に没頭しておられたので、これらの記事を単行本化される余裕はなかったに違いない。そこで、『洋楽渡来考』をはじめとする先生の著作の編集をしてこられた日本キリスト教団出版局の井関頌司さん、秦一紀さんに相談した。井関さんはすでにリタイヤされていたので、刊行に向けて秦さんとの二人三脚が始まった。



皆川達夫セレクション 『宗教音楽の手引き』

皆川達夫：著
樋口隆一：監修
日本キリスト教団出版局
2024年4月19日刊
四六判 128頁
1,540円

まず私なりの視点で遺稿を編集してみたが、かなりの分量となり、大部の遺稿集は高価とならざるをえず、計画は難航した。すると秦さんが妙案を考えしてくれた。

読者の対象が微妙に異なる三分冊とし、『皆川達夫セレクション』全三巻として世に問おうというのである。こうして第一巻は、一般の読者を対象に

キリスト教音楽の歴史とそのジャンルを楽しく紹介する『宗教音楽の手引き』、第二巻は、ルネサンスのポリフォニー音楽を理解するための基礎的な知識をわかりやすく説明した『ルネサンス古楽の記譜法 白符計量記譜法入門』、第三巻は、第一級の音楽史家だった皆川先生ならではのルネサンスやバロックの音楽、キリシタン音楽に関する珠玉のエッセイを軸に、さらにミステリーからワインまで幅広い『音楽も人を救うことができる』という、『皆川達夫セレクション』のラインナップが完成した。

出版局が危惧したのはもちろん第二巻『ルネサンス古楽の記譜法』だった。しかし指揮者でもある私にはまったく危惧はなかった。全日本合唱コンクールの審査をした経験から、中学高校から大学・一般に至る全国の合唱団の多くが、ルネサンスの合唱曲を喜んで、

しかも高い水準で歌うことを知っているからである。実はこうした状況は、長年にわたり全日本合唱連盟を通じてルネサンスの合唱音楽を全国に普及された皆川先生のご努力の成果なのである。

同書が出版される直前の本年の夏、上野の国立西洋美術館では「内藤コレクション 写本——いとも優雅なる中世の小宇宙」という特別展が開催された。行ってみると、平日の午前だといふのかかなりの来館者があり、熱心に中世音楽の写本を覗き込んでいる。その対象は美しい細密画だが、もし多少とも中世ルネサンスの楽譜についての知識があれば、そこに書かれている聖歌のメロディーを辿ることができ、それらの写本の本当のメッセージを体感できる。「こんな楽譜が読めたら良いのに」という声が聞こえてくるようだ。

皆川達夫セレクション
『ルネサンス古楽の
記譜法——
白符計量記譜法入門』

皆川達夫：著
樋口隆一・宮崎晴代：監修
日本キリスト教団出版局
2024年8月23日刊
B5判 64頁
3,080円



私の合唱団は明治学院バッハ・アカデミー合唱団といい、主としてバッハ以降、つまりバロックから現代に至る合唱曲を歌っているが、この本を見せたところ、たちどころに多数の注文が集まった。類書がないだけに、合唱人にとってこの本は宝物なのである。もちろん分厚い専門書はあるが、原理原則だけをわかりやすく説明してくれる

のは、さすが皆川先生の独壇場なのである。驚いたことに、この本は楽譜店だけではなく、一般の大型書店からも多数の注文がある。

第三巻の書名『音楽も人を救うことができる』は、第四章「音楽と人生」に収められた短いエッセイの題名によっている。朝日新聞夕刊の「自分と出会う」という欄のために書かれたこのエッセイで、著者は人生を回顧する。

戦争末期に青春を迎えた彼は、当時の国粹主義に反発し、人を殺すのではなく「生かすことができる」という理由で医学の道を選んだ。しかし戦争は終わり、生きながらえることができた「わたくし」は、「一度死んだはずだから、念願の音楽史研究の道を選ぶことにした」という。ある先輩から「医学は人を救うことができるが、音楽は救えない。医者になれ」と忠告されたが、「わたくし」の心中には「音楽も人を

救うことができる」という思いが鳴り響いていたという。

皆川先生の人生と研究は、この強い思いによって貫かれていた。隠れキリシタンの「オラシヨ（祈り）」との出会いからキリシタン音楽研究にのめり込まれたのも、かれらが「オラシヨ」を歌うことによって生きる力を持ち続けられたからだという強い信念がおりだったからだろう。

最後のエピソードはさらに感動的である。ある女子大で講義を終えた「わたくし」のところに、ひとりの女子学生がやってきた。「先生、私がこの世に生まれて今日あるのは、先生のおかげです」。その学生の母親は、彼女を胎内に宿しながら、ベッドから起き上がることも出来ないほど苦しんでいた。唯一の楽しみは、FMから流れる「バロック音楽の楽しみ」を聴くことで、「この世にこんな美しい音楽があるの



皆川達夫セレクション
『音楽も人を
救うことができる』

皆川達夫：著
樋口隆一：編
日本キリスト教団出版局
2024年10月25日刊
A5判 256頁
3,960円

だから、私もがんばろう」と決心し、無事その学生を産むことが出来たというのである。そのとき「わたくし」は、「音楽も人を救うことが出来る」ことを実感できたのである。

皆川先生は九二歳に至るまで、NHKラジオ第一の「音楽の泉」の解説を続けられた。それも最後はNHKのスタッフが老人ホームにまで機材を持ち

込み収録したという。そんな異例の対応をうながされた原動力は、この確信と使命感にあったのである。

このまずしい紹介文を終えるにあたり、第三巻の各章について簡単に紹介したい。

第I章「キリスト教と音楽」は、「グレゴリオ聖歌との出会い わたくしたちに平和をお与えください」で始まる。ここでも先生の音楽研究が、カトリックの信仰と音楽への愛に基づき、つまるところ「平和への祈り」へと帰結することに感動させられる。

貴重なのは、章の最後を飾る服部幸三、延原武春両氏との鼎談「ヘンデル劇音楽作曲家の光と影」である。各氏の該博な知識はいうまでもないが、巧みな語り口から、ヘンデル音楽の素晴らしさと本質を教えられる。

第II章「合唱音楽の楽しみ」では、二六歳でみずから中世音楽合唱団を創

立され、七十余年にも及ぶ活動を通じて、研究と実践を結びつけられたこと。さらには、全日本合唱連盟を通じて、日本全国の合唱活動に多大な影響を与えられたことの意義が自ずと理解できる。

第III章「キリシタン音楽研究」は、先生のライフワークとなった主著『洋楽渡来考』の成立と意義を、様々な観点からわけてくれるエッセイや講演、鼎談からなっている。『洋楽渡来考』は博士論文でもあったため難解なところも少なくないが、これらの小文は、そのエッセンスを理解するために大いに力となるものばかりである。

第IV章「音楽と人生」についてはすでに論じたが、ミステリーや漢詩、ペルシヤ絨毯、ワインに美食といった幅広い皆川ワールドを知る上でまたとないものとなった。大いにお楽しみ頂きたい。

苦しむ人に寄り添う、 そこから紡がれる言葉

〈評者〉 川上直哉



信仰生活ガイド
苦しみの意味
柏木哲夫編



「正しい説教」というものは、あるのでしょうか。

私は「ある」と思っていました。ですから、震災前まで、私は「完全原稿」を、いつも作っていました。「完全」な原稿です。そのために、説教準備の時は、とても緊張して、機嫌が悪く、家族にも迷惑をかけていました。

二〇一一年に震災がありました。津波と放射能の被災地で日々を過ごした私の説教は、全く変わりました。「正しい説教」と「御言葉が正しく語られること」は、まったく違っていると、私は現場で知らされたのです。

『苦しみの意味』と題されたこの本を読んで、私はそのことを思い起こしました。「苦しみに意味があるのか」という間に、神学的な「正解」を出すこと―そこには、何の意味もない。そう知らされる本です。「どう答えても、間違っている」という窮境で、ただ、痛む人に寄り添い、何

とか言葉を紡ぎ出してみる。そんな証と対話と説教が集められて、この本になっていました。

編者は柏木哲夫さんです。「はじめに」で、柏木さんは、自分自身の過去の苦しみを振り返り、その「意味」を模索します。そして神さまがその苦しみを与えたとは思わないと断言し、同時に今に至る道を神が守り続けてくださった、心から感謝していると語ります。「全知全能」とか「摂理」といった神学議論が全く力を失う場面。ただ、「それでも」感謝している自分がある。そのことが、証になる。自分自身の存在そのものが「苦しみに意味がある」ということの証拠になるということでしょう。

また、励ますことが、間違っている時がある。そう柏木さんは語ります。励ますことの難しさを教えられます。続いて視力を失った時、まだ幼い息子を交通事故で奪われた

時、重い病いに罹った時、そして、東日本大震災。そうした現場から紡がれた16人の言葉が続きます。

この本は四部構成になっています。まず(一)苦しみの当事者の言葉が集められ、そして、(二)苦しむ人に伴走する人について語る言葉がまとめられています。その後、(三)聖書を読み解く著者二人の努力があり、そして最後に、(四)現場から聖書が想起されたことの証が集められています。この後半の二つのまとまりの間に、決定的な違いが感じられます。聖書から現場を語ることの空疎さと、現場の光で聖書を照らすときに聞こえてくる神さまの声との違いが。

私は、ルカ福音書六章を思い出しながら、この本を読みました。イエスさまはそこで、貧しさで病いに苦しむ人々がごった返す平地に降りて行き、その群衆のただ中から、

弟子たちに語ります。「幸いなのは、悲しむ人々だ!」と。

イエスの弟子であると思っている私たちは、その御声を聞いて、当惑します。「そんなばかな」と。そして私たちは、まさに今、神さまが悲しむ人々のそばにいて、共に涙を流しながら、何か良いことをそこに起こしていることを知る。そうしたドラマが今も起こっていることを、この本は私たちに知らせます。そのドラマに触れて、はじめて説教壇からも「御言葉が正しく語られること」が起こり得る。私のような土の器にも、神の言葉が語り得るとすれば、そうした段取りを踏むのだろう。そんなことを思わせてくれる本でした。

(かわかみ・なおや〓日本基督教団石巻栄光教会牧師)
(四六判、一二八頁、定価一五四〇円、日本キリスト教団出版局)

イエスの歩み31

私に従いなさい

吉村和雄



降誕から復活まで、イエス・キリストの生涯を31日でたどる。一日ごとに聖書の言葉、短い解説と祈りを取録。受洗してこれからイエスについて知りたい方や、クリスマスプレゼント、病床へのお見舞いなどにもぴったり。 四六判・144頁・定価1760円

70歳からのキリスト教

大澤秀夫

聖書でたどる人生の旅



聖書を高齢者の視点で読むと新たな発見がある。旧約編では人物を中心に、新約編では場所や事柄を中心に据えて聖書を読み解く。『信徒の友』連載を書籍化。 四六判・128頁・定価1540円

日本キリスト教団出版局

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18

☎03-3204-0422 ☎03-3204-0457

E-mail eigyou@bp.uccj.or.jp (価格10%税込)

<https://bp-uccj.jp>

毎日、神の言葉に出会い、 導かれる

〈評者〉 永井信義



日々の黙想
366日で読む聖書
ニーナ・スミット著
日本聖書協会訳



日本人牧師や本書のような海外の著者も含め、毎年のように新しい黙想書が出版される中、今回、聖書そのものに多くふれる機会を提供する、『日々の黙想 366日で読む聖書』が発売されることとなりました。キリスト教用語の使用に配慮の行き届いた、特にまだ読んだことのない人にもやさしく、レビ記、エズラ記、オバデヤ書、フィレモンへの手紙は除きますが、聖書全体をナビゲートする内容となっています。

これまでの黙想書の多くは、著者が記した部分がその多くを占めている場合が一般的ですが、本書はそのほとんどが聖書からの引用で、聖書を大きな神の物語として読みたい人にとっては、毎日読み進めていく中で、その全容を理解するのに大いに役立つ構成となっています。

また聖書の言葉に直接接することで、テモテへの手紙二

3章にあるように「聖書はすべて神の靈感を受けて書かれたもので、人を教え、戒め、矯正し、義に基づいて訓練するために有益」であることを、読者は毎日の生活の中で体験することができます。著者は「何が真実であり、何が間違っているかを、私たちは聖書から学ぶことができます」と語っていますが、フエイク、つまり、嘘や偽物が氾濫するこの世界で、聖書と出会うことが私たちには不可欠ではないかと思うのです。

本書のもう一つの特徴は、各ページの一番下の部分に、この作品が初邦訳となる著者ニーナ・スミットの「短くシンプルなメッセージ」が記されていることです。それも三、四行ほどの、その引用箇所にかかれていることをまとめ、さらに思いめぐらすために役立つ問いが載せられています。たとえば、新約聖書のヘブライ人への手紙3章と4章が

引用されているページでは、次のようなメッセージを記すことでよりわかりやすく、また、読者に神の言葉に真摯に向き合うことの大切さを伝えていきます。

「神の言葉は生きていて、力があります。どんな剣よりも鋭く刺し貫き、私たちの心の奥底にある思いや願いをあらわにします。神の前にあらわでない被造物はありません。私たちは神に対して、説明責任があるのです。」

旧約聖書のヨシユア記24章で、ヨシユアがイスラエルの人々に「あなたがたが仕えようと思うものを今日、選ぶがよい。しかし、私と私の家は主に仕える」と選択を迫った場面では次のように問いかけ、チャレンジしています。

「ヨシユアは、仕える相手を選ぶようにと、民に選択を迫りました。民は神を選びましたが、すぐにそのことを忘

れてしまいました。あなたは誰を選びますか。また、その決断に忠実ですか。」

最後に、本書の装丁は日々の利用にも飽きさせないもので、しつくりと手に収まるサイズ、しかも、これまでのシリーズよりは年齢を重ねた者の目にもやさしい文字の大きさで、毎日読むことへと誘います。プレゼントにも最適ですが、やはりまずはご自分で使っていたきたい一冊です。聖書の本文を中心にデザインされている本書に助けられながら、「私の足の灯 私の道の光」（詩編119編）である「神の言葉」と出会い、導かれる旅を続けていきたいと心から願います。

（ながい・のぶよし）東北中央教会牧師／拡大宣教学院学院長
（A5変型判・四一六頁・定価二四〇〇円・日本聖書協会）

神学ダイジェスト137号

急速な変化を遂げる現代社会。その中であって、多様な価値観に直面するキリスト者。本誌は海外の神学動向を紹介しながら、現代人のかかえる信仰への真摯な問いに光をあてる。

2024年12月発行
A5版112頁
定価638円（税込）

特集 奉獻生活

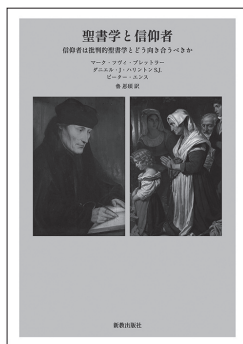
巻頭言 奉獻生活を考える
回勸『兄弟の皆さん』から修道者にむけて
神の優しさを示すために
修道生活——カオスからカイロスへ？——
使徒職の共同識別
詩編における死のイメージ
物語分析的聖書解釈の可能性
聖書——移動する民が書いた書物——
うつつに取り組むためのイグナチオの手引き

菅原 裕二
M・チエルニ
C・デルバリエ
V・コデイナ
A・ニコラス
E・ツェンガー
A・ウエナン
D・マルクル
B・マクマヌス

上智大学神学会
神学ダイジェスト編集委員会
東京都練馬区上石神井4-32-11
〒177-0044 Tel & Fax (03) 3594-4349
E-mail shing-dt@netjoy.ne.jp

聖書と真剣に向き合う人たちに 推奨する

〈評者〉並木浩一



聖書学と信仰者

信仰者は批判的聖書学とどう向き合うべきか

M・Z・ブレットラー、D・J・

ハリントン、P・エンス 著

魯 恩碩訳



聖書学と信仰との関わりを意識して、旧約聖書のありようを論じた書物が出版された。十九世紀に批判的聖書学が出現して以来、聖書学と信仰との間に緊張が生まれた。イエスの意味づけを扱う新約学ほどではないが、旧約学でも両者の間には緊張があり、信仰者は何らかの調停を行っている。たとえば、天地創造の記事。進化論や天文学の知識を持つ信仰者はそれに客観的な権威を認めないが、創造信仰の意味は認めるであろう。このように信仰者の多数は知識と信仰との間で適当に折り合いをつけている。

しかし両者の関係は、信仰に素直に生きてきた若者たちには深刻である。彼らは聖書の権威を揺さぶる批判的な聖書学に出会って困惑し、悩む。本書の訳者は第一級の旧約学者であるが、かつて若き日に留学先で批判的旧約学の授業を経験して衝撃を受けた。今は教師として、かつての自

分が味わった同じ動揺を学生たちから聞くという。そのことが本書訳出の動機の一つである。

日本では科学的な知識に抵抗する信仰者は少数である。しかし米国では福音派の勢いが強く、かなりの人が聖書の権威に挑戦するような聖書学の営みや科学的認識を退ける。その状況を背景にして、本書では米国のユダヤ教、カトリック、プロテスタントを代表する聖書学者三名が旧約聖書の性格を徹底して論じる。彼らは順にそれぞれの聖書観を述べ、ほかの二人が熱い応答を返して三回に及ぶ。これは聖書学と信仰との生産的関係を築くための貴重な対話である。

彼らの立ち位置に関わる発言を要約しよう。ブレットラーによれば、ユダヤ教は時代遅れのトーラー（五書、とくに律法）を書き換えることなく、解釈によって更新する。聖書学の五書批判もその解釈活動の一つと見なされ得る。

権威はテキストではなく、解釈にある。

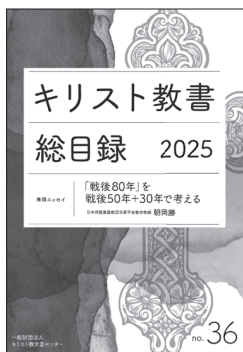
ハリントンが所属するカトリック教会は、聖書を「人間の言葉で語られた神の言葉である」と見なしている。聖書は神の言葉であるから霊的な解釈を重ねるが、それが人間の言葉である側面については批判的聖書学を受け容れる。万一、聖書の解釈が争われるときには、教皇と司教たちによって構成される教導機関が権威ある解釈を下すという。教会の秩序と伝統が聖書解釈の砦となる。

エンスはプロテスタントの聖書観を展開する。ルター以来、教会を忠実に証しているか否かの最終裁定者は聖書であり、信徒は教会の伝統に依拠できない。この「聖書のみ」の原則は聖書学を促進した。しかしそれは同時に聖書学の世俗化への扉を開き、それによって聖書の信頼性と統

一性とか脅かされるに至った。エンスはこのような聖書のありさまを、「真の人間であると同時に真の神である」というイエスの「受肉」との類比によって理解する。議論は新約聖書に越境せざるを得ない。訳者もそうであるが、私はエンスの受け止め方に共感する。私も旧約学を開始した大学院時代には、聖書の証言と歴史的現実との落差を知って考え込み、人の言葉によってご自身を証しする神の自己卑下に思いを馳せた。

読み応えのある書物である。聖書と真剣に向き合おうとする人びとに勧めたい。聖書が置かれている状況を学び、対応の仕方への示唆を本書から得るであろう。

(なみき・こういち) 国際基督教大学名誉教授
(A5判・二一九頁・定価二九七〇円・新教出版社)



キリスト教書総目録

2025年版

(12月中旬発売)

「戦後80年」を戦後50年・30年で考える

巻頭エッセイ 朝岡勝氏

内容

総記・年鑑・辞(事)典・図説・年表・全集・著作集・叢書・講座・聖書・聖書学・神学・宗教哲学・思想・倫理・伝記・フロンタジヨン・信仰・入門書・人生論・説教集・文学・小説・評論・エッセイ・詩・劇・音楽・美術・建築・教育・保育・心理・社会福祉・児童・絵本・讃美歌・式文・DVD・CD・点字・キリスト教関連雑誌・新聞・書名索引・著者索引・掲載出版社名簿

■ A5判 一般頒価1冊286円+税 送品手数料200円
■ お近くの書店様でお求めください。

一般財団法人 キリスト教文書センター

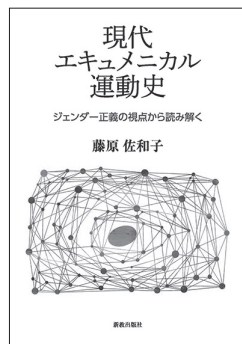
〒162-0014 東京都文京区関口1-44-4
TEL:03-3260-6520

現代エキュメニカル運動と 《ジェンダー正義》の交差点

〈評者〉西原 廉太

「エキュメニカルの冬」という表現が顕在化してきたのは、一九八二年に世界教会協議会（WCC）信仰職制委員会によるいわゆる「リマ文書」（『洗礼・聖餐・職制』）の発表を頂点として、その後一気にエキュメニカル運動の機運が冷え込む一九九〇年代以降であると言われる。しかしながら、二一世紀に入ってからWCCや世界聖公会（アングリカン・コミュニオン）の教会間対話に濃密に関わり、数多くの歴史的な進展に立ち会ってきた評者の感覚からすれば、「冬」ところかそれらは熱気に満ちた現場でもあった。むしろ、信徒・教職者数の激減、財政逼迫、セクシュアリティなどの課題をめぐる分裂などの危機的状況に直面するキリスト教界本体の「冬」の問題こそが喫緊であると確信する。

一方で、日本における神学・キリスト教学研究の中で、



現代エキュメニカル運動史

ジェンダー正義の視点から読み解く

藤原 佐和子 著



エキュメニズムをテーマとする研究者層は非常に薄いのも事実である。日本語での翻訳ではないエキュメニズムに関する研究書の出版も数少ない。そのような中、藤原佐和子さんによる本書の上梓は、日本のエキュメニズム研究史に刻まれる画期的貢献であることは間違いない。また、本書においても日本におけるエキュメニカル研究の系譜として、竹中正夫、神田健次、大津健一、山本俊正、村瀬義史、そして評者の名前も挙げられているが、思えばいずれも男性神学者、教職者であり、女性・信徒による本格的研究成果の公開は初めてのことである。

それゆえに、エキュメニズムに対する本書の切り口は、先行研究からはほぼ抜け落ちてきた視点、すなわち、女性の按手、ヒューマンセクシュアリティ、同性愛、ジェンダー正義といったキーワードによって貫かれる。著者が試

みるのは、「括弧付きの『女性』やLGBTQ A+の人々（ノンバイナリーやジェンダー・ノンコンフォーミングの人々を含む）」に対するあらゆる暴力、差別、排除に反対する立場から、WCCの運動を批判的に論及してみる」（14頁）であるが、こうした本書のアプローチは世界のエキュメニズムにも重要な問題提起となるものであり、そういう意味でも本書の英訳版の出版が期待される。

本書は、「序論」、第1章「エキュメニカルの冬」、第2章「信徒の参加」、第3章「女性の参加」、第4章「女性の按手」、第5章「ヒューマンセクシュアリティ」、第6章「ジェンダー正義」、「結論」で構成され、それぞれの課題が現代エキュメニカル運動史を丁寧な俯瞰しつつ見事に整理される。これからの議論は最終的にはエキュメニズムにおける「ジェンダー正義」へのコミットメントのための視座へと収斂され、それは、「インクルーシブコミュニティに向かって教会が刷新されていくために、そして、完全な人間であるキリストのゆえに、『ジェンダー正義』は今日、すべての教会を結び合わせるエキュメニカルなアイデンティティとして、私たち一人ひとりに問われようとしている」（202頁）との結論に至る。

充実した「参考文献一覧」、「『現代エキュメニカル運動

史』年表」に加えて、六つのコラム（「世界宣教会議（WMC）」、「国際宣教協議会（IMC）」、「生活と実践（Life and Work）」、「信仰と職制（Faith and Order）」、「世界教会協議会（WCC）の成立」、「ミッシォ・デイ（missio Dei）」は非常に分かりやすくポイントがまとめられており、初学者にとっても有益である。

エキュメニカル運動に関心を持つ者のみならず、すべてのキリスト教関係者にとって必読の一冊がここに与えられたことを心から喜ぶたい。

（にしはら・れんた 立教大学総長・キリスト教学校教育同盟理事長
（A5判・二三八頁・定価三七四〇円・新教出版社）

手遅れにならないうちに

〈評者〉澤 正幸

本書が、今、この国で出版されることは時宜にかなったことだと言わねばなりません。

とりわけ「ウエストミンスター信仰告白における合法的戦争」の論文で取り上げられている戦争の問題は、今の日本のキリスト教会にとって喫緊の課題だからです。

「実際に戦争が起こると、歴史上の教会が、聖書から学び続けてきた『個人の尊厳と何か』『国家とは何か』『国家の権能とは何か』『国家による人間支配の限界とは何か』といった神学的テーマに関する議論が難しくなるのです。国家が圧倒的な力で、個人も教会も巻き込んでいくからです。それゆえ、戦争が起こってから議論しているのでは間に合いません。平時に議論し、自分たちの立ち位置を確認しておく必要があります。『国家とは何か』『国家と教会との関係は何か』『戦争とは何か』です。それを教会のコンセン

改革教会の 信条と展開

袴田康裕
Masahiro Hakoda



改革教会の信条と展開

袴田康裕著



サスとして言葉化しておく。それが、今、求められていることなのだと思います」（一五七ページ）。

ウクライナ・ガザでの戦争が「台湾有事」などのプロパガンダに乗って、日本に波及することを深刻に憂慮している今こそ、教会は「手遅れにならないうちに」戦争について神学的に考え抜く必要に迫られています。

著者は、自らの所属する日本キリスト改革派教会の信仰基準、ウエストミンスター信仰告白第23章第2節が認めている「合法的戦争」について、「複雑なことを単純化せずに、その複雑さをしつかり見つめて、それを聖書の光によって、神学の伝統の助けを得ながら考え抜く」としています。

第23章「国家的為政者」全体のコンテキスト、宗教改革期の他の信条との比較、再洗礼派への批判にも言及した後、アウグスティヌス以来の「正義の戦争」の神学的系譜を明

らかにした上で、一七世紀の戦争と核兵器の脅威にさらされている現代の戦争の違いを踏まえつつ、次のような結論を導き出します。

「以上のことを考慮するなら『合法的な戦争が許される』と記されていても、それは決して安易な戦争肯定には結びつかないことは明らかである。私はむしろ、この規定はリアリズムに基づく力強い平和主義の規定ととることができると思う」。

「原理主義的な絶対平和主義では対処できない罪深い人間の現実直面する」リアリズムに立ちながら、戦争の時代にも、ウェストミンスター信仰告白が極めて抑制の効いた形でしか「合法的戦争」を認めなかったところに、今日の私たちが学ばべき平和のために努力する精神を見出すこ

とができる。「戦争の性質が大きく変わった今日、教会が戦争を避けるために努力するのは当然といわなければならない」。「原理主義的絶対平和主義は取らないが、現実には絶対的な平和を追求するしかない地点に立たされていると言えらる」。

日本キリスト改革派教会が上記の線に立って採択した「平和の宣言」は改革派神学の伝統に立つ諸教会、さらに公同の教会に向けて開かれた宣言だと言うべきでしょう。著者の「改革派長老派伝統に堅く立つ教会を建てること、日本宣教全体への貢献につながる」との願いが本書によつて実現することを心から願います。

(さわ・まさゆき 日本キリスト教会牧師)
(四六判・二二〇頁・定価二八六〇円・教文館)

ドイツ敬虔主義著作集のご案内



新しい人間

読みやすい言葉で

四六判上製・四〇〇頁・三〇八〇円

地上的、生得的なこの世にあつて、
天神的、霊的生活はいかに現出するか。
ルターに次ぐ神学者と目されながら今日では忘れ去られていた改革派ルター主義者シュペナーは、ドイツ敬虔主義の要ともなった人物。その説教集成のひとつである本書は日本におけるシュペナー著作物の初め、完全な形で翻訳出版として目が離せない。著者による膨大な訳註がこれを後押しする。

- ドイツ敬虔主義著作集 全10巻の構成と訳者・各巻四六判上製
- 第1巻 シュペナー「敬虔なる願望」佐藤貴史・金子晴男訳
 - 第2巻 シュペナー「新しい人間」山下和也訳 既刊 三〇八〇円
 - 第3巻 シュペナー「再生」金子晴男訳
 - 第4巻 フランケ「回心の開始と継続」菱刈晃夫訳 第5回配本予定
 - 第5巻 ベンケル「グノーモン」と「歩んだ道と言葉」金子晴男訳
 - 第6巻 ツィンツェンドルフ「福音的真理」金子晴男訳 第3回配本予定
 - 第7巻 エーティンガー「自伝」喜多村得也訳 第4回配本予定
 - 第8巻 エーティンガー「聖なる哲学」喜多村得也訳 既刊 二二〇〇円
 - 第9巻 テルステーゲン「真理の道」金子晴男訳
 - 第10巻 ドイツ敬虔主義の研究

（ご予約承り中）

ヨベル YOBEL Inc. info@yobel.jp
〒113-0033 東京都文京区本郷 4-1-1-5F
TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858
出版の手引き / 呈 (税込)

教派の特徴を鋭く分析した 類稀な入門書

〈評者〉 藤本 満



メソジスト入門

ウエスレーから現代まで

W・J・エイブラハム著

加納和寛、赤松真希訳



翻訳の責任を担った加納和寛の専門分野は必ずしもメソジストの歴史や神学ではない。関西学院大学で教鞭を執り、神学部 of 学生を連れてソウルのメソジスト神学大学を訪れたとき、韓国側から質問を受けた。「メソジスト的な牧師養成教育プログラムとして、具体的にどんなことをしていますか？」

加納は答えに窮したという。自分は、関西学院大学で教鞭を執りながら、「このままメソジストのことをあまりよく知らないままではいけない」のではないか（二二八頁）。こうして訳者が出会ったのが本書である。

「入門」と題されているが、エイブラハムの書物はいつも多角的で挑戦的である。ウエスレー・初期メソジストを的確に把握した上で、その後のメソジストの深化と広がり、教会の分裂、世界各国のメソジスト教会の特色、労働運動

から教育・医療などの社会的奉仕、さらにペンテコステ運動への波及など、話題は多岐に及ぶ。出来事・人物・神学、とメソジストの特性を浮き彫りにする著者の学識には圧倒される。流暢な翻訳にも感嘆する。

このような本は類を見ない。翻訳されたお二人に感謝すると共に、メソジストの流れにある教会（ペンテコステ派も含めて）の必読書となることは明らかである。

メソジストは「教会と国を改革するため」に神が起こされた霊的刷新運動であるとウエスレーは理解していた。が、そこには初期の段階から「キリスト教全体の新しいビジョン」（五六頁）が具現化されていて、国教会の精神や構造に収まるものではなかった。

メソジストに与えられた「使徒的使命」は、その後の歴史において形を変えて刷新を繰り返していく。一九世紀英

国では、社会的正義（聖化）を求めて、メソジストは奴隷売買禁止運動、労働組合運動を支え、さらに救世軍のような貧者の救済を目的とした組織も誕生する（第七章）。北米では「意識的な聖性（ホーリネス）の経験」（九八頁）が強調され、それがペンテコステと重ねられて「聖霊のバプテスマ」と呼ばれて世界をめぐる。メソジストの組会は大人向けの教会学校、やがては弟子訓練・スモールグループへと刷新されていく（第六章）。

エイブラハムの優れた分析が光を放っているのはメソジスト神学の流れをどのようにとりまとめるかにある（第五章）。メソジスト教会は、ドイツの自由主義神学、プロセス神学、多元主義、解放の神学と、手を広げることを許してきた。あまりにも幅ができてしまった現実に対して、著者も影響を受けたアルバート・アウトラーは、原点となるウエスレーの全一五〇編の説教を編纂し、ウエスレー神学の魅力を明らかにした。さらにメソジスト神学を聖書・伝統・理性・経験の「四辺形」によって権威づけることによって、誰もがメソジスト神学の一つのテーブルに座せる幅を持たせた。だが、「さまざまな類いの神学を探索した末に、時を経て教会をウエスレーという港へ回帰させる」（二〇二頁）というアウトラーの期待は実現していないと

著者は考える。

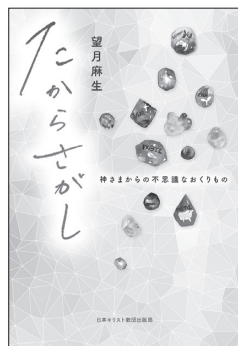
著者は、メソジスト神学が輝きを放つのは、それが「貧しい人々や社会の片隅に追いやられた人々に解放をもたらす」とき——これこそがメソジストの「神学的課題の主旋律でありつづけた」（一〇三頁）と考えている。おそらく、この主旋律に（本書の至るところで用いられている用語である）「ホーリネス」という旋律を重ねても、著者の意向に反することはないと思う。

（ふじもと・みつる＝インマヌエル高津キリスト教会牧師）

（四六判・二四六頁・定価二六四〇円・教文館）

「たからさがし」は 疲れに効く！

〈評者〉 上田亜樹子



たからさがし
神さまからの不思議なおくりもの
望月麻生著



おそらく私たちは、何かを失うことについては非常に敏感だ。それは苦痛を伴うし、罪悪感や怒りまでおまけとしてついてくるので、時間が経っても何をどの程度失ったのか、いつまでも数え上げる。しかし、すでに与えられている恵みについては、ほとんどカウントしない、というかできない。悪気はないのだが、恵みは在ってあたりまえ。また、自身の努力で獲得したと信じているものしか数えないから、恵みに気がつきにくいのかも知れない。

日常の些細なことの中にも、恵みはたくさん潜んでいる。でも、通勤電車が時刻通りに来なかったり、パソコンがフリーズしたりすると、途端にパニックに陥る。今までできたことを急に失うなんて、なぜ、今こういう目に私が遭わなくてはならないのかと落ち込む。そんな中で、望月麻生先生の『たからさがし』は、わたしたちが受けている恵み

にちゃんと「目を留めよう」と、率直に呼びかけているように思う。

すでに与えられているが、気づくこともなく放置されている「恵み」に目を向けるのは、きれいごとでも、そんなにカッコいいことでもない。また、もつと気楽に生きられる、優位になれる、ということでもない。それは素朴で、地味な努力によるものだ。当てが外れることや、解決したことのない困難に直面するのは偶然ではなく、何かしら学ぶことがあるはず、という神への信頼に基づいている。

私が一番好きなくだりは、「ピアノ」というタイトルのついた「ヘタになる」話である。ピアノのレッスンを再開した著者が先生から「ヘタになってきたね」とうれしそうに言われ、最初は困惑した。しかし、その先生によると、人の成長は同じペースで進んでいくのではなく、意外にも

練習をたくさん積んだのち一旦は「ヘタに」なつてから、初めてのようないきなりで一から練習を重ねると上達する、と教えられた話である（だいたい私の解釈が入つてしまつてゐるかもしれないが）。

「一旦ヘタになる」ことは、牧師なら説教や牧会カウンセリングで、また誰でもさまざまな分野で経験するのではないだろうか。うまくいかなかった経験を経ても努力を重ねると、ある程度は克服した段階に辿り着けたような気持ちになる。しかし、これでイケると思つて、その先も同じことを繰り返してばかりいると、自分の底力のなさを思い知らされる事件に必ずぶち当たる。そして、あれだけ準備したのに、なぜ「魔法」が効かなかつたのかと立ちつくす。そんなとき、もうこれ以上何をしたらよいのかわからない

と絶望するのではなく、今一度、原点に戻り、神さまから預かつてゐるたくさんの恵みに信頼して、「ヘタになる」状態から、再出発するということなのではないか。

力尽き、何もする元気がないとき、長い文章を読むのは覚悟がいるが、この本は手に取りやすい。春夏秋冬の四季に分けられた章の中に、エッセーが6つずつ並び、いずれも4ページで1話が完結する。疲れたときに行き当たりばつたりにページをめくり、何も考えずに1つだけ、もう少し行けるなら、2つ読んでもいい。また、もしあなたの心に、疲弊した誰かの顔が浮かぶなら、その人へのプレゼントにいいかもしれない。

（うえだ・あじゅこ＝月島聖公会教会牧師）
（四六判・一二〇頁・定価一五四〇円・日本キリスト教団出版局）



新刊

アッカド語文法

青島 忠一郎



LITHON

アッカド語文法

青島 忠一郎

- B5判並製 300頁
- 定価4,400円(税込)

古代メソポタミアで主要な言語であったアッカド語。本書はアッカド語の基礎文法を日本語で本格的に学べる初の文法書です。楔形文字の読み方やアッカド語の発音に始まり、各種の文法事項をわかりやすく解説。各課には練習問題と解答も掲載。また、講読テキストとして『ギルガメシュ叙事詩』や『ハンムラビ「法典」』の抜粋等も掲載。アッカド語を初めて学ぶ方が独習できる内容で、すでにアッカド語を学んだ方にも文法ハンドブックとして活用できる一冊です

LITHON [リトン]

〒101-0061 千代田区神田三崎町2-9-5-402
☎ 03-3238-7678 FAX 03-3238-7638

■新教出版社

平和の福音に生きる教会の宣言

——日本キリスト改革派教会「平和宣言」と解説

吉田 隆、長谷部弘、弓矢健児、豊川 慎著

二〇二三年の改革派教会の大会で採択された宣言は、今日と将来の教会がこの世に対して果たすべき責任を「平和をつくる」という視点から積極的に展開する。本書は、この宣言が日本の教界で広く共有され、学びの素材とされるために、本文と共に懇切な解説を施した。

小B6判・120頁・定価990円

静寂者ジャンヌ

——ギユイヨン夫人または抵抗の神秘主義（仮題）

山本賢蔵著

絶対君主ルイ一四世の時代を生きた一人の女性の本格評伝。彼女は「異端の女性神秘家」として歴史の闇に葬り去られてきたが、その生涯を丹念に追うと、そこには、男性支配のミソジニー社会の中で自己を貫き通した、鮮烈な抵抗の生き様が浮かび上がる。日本で初となるギユイヨン夫人の本格評伝。

四六判・512頁・予価4400円

INFORMATION

近刊情報

■日本キリスト教団出版局

押田成人

——遊行の巡礼者

宮本久雄、石井智恵美編

信州に高森草庵という共同体をひらき、祈りと労働の日々を送った押田成人神父。その生涯と思索をたどる評伝的一冊。

四六判・176頁・定価2200円

それでも、希望に生きる

——聖書黙想366日

上垣 勝著

テゼ共同体の祈りに学び、その実践に生きる著者が、聖書と現実世界、この二つを日々の生活の中で切り離さずに黙想した日毎の糧。

A5判・336頁・定価4400円

聖書の基礎知識

——新約・旧約外典篇

C・ヴェスターマン、F・アーヒウス著

吉田 忍訳

碩学による新約聖書・旧約外典各文書の解説書。各文書の成立事情や構造だけでなく、文書間の響き合いも理解できる。

A5判・232頁・定価4400円

聖書における和解の思想

左近 豊編

共同体の危機のさなかで編まれた旧新約聖書。その中心的思想のひとつが「和解」である。聖書における「和解」の思想をたどり、今日的意義を明らかにする意欲作。

A5判・352頁・定価4400円

説教黙想アレティア叢書

創世記1―28章

日本キリスト教団出版局編

『説教黙想アレティア』から書籍化。厳選された執筆者による、創世記の序論と、天地創造から「ベテルの夢」まで重要単元の説教黙想を収録。

A5判・270頁（予定）・定価3520円

■教文館

N・T・ライト新約聖書講解4

すべての人のためのルカ福音書

N・T・ライト著

津村春英訳

現代の第一級の新約聖書学者であり、教派を超えて親しまれている著者による新約聖書講解シリーズ、待望の新刊！

四六判・476頁・定価4180円

INFORMATION

近刊情報

■キリスト新聞社

読みつつ生き、生きつつ読む

——自伝的読書論

朝岡 勝著

「本」との出会い、そこにある「ことば」と「人格」との出会い。読書という人格的体験に秘められた出来事に、どれほど人を成長させる力があるのか。「本」の力を再発見する、体験的読書録。

四六判・216頁・定価1650円

鈴木道也著 試論「十全のイエス・キリスト」へ 違いがありつつ、ひとつ

A5判・四五二頁・三〇八〇円

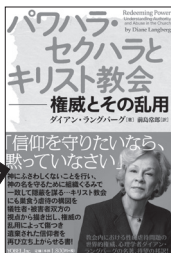


大貫隆先生推奨!...論述が平静かつ公平。先行研究からの引用は常に正確かつ肯定的で、自説の中へ統合する姿勢。無益に論争的などころがなく建設的。文体は一般読者向けで分かりやすい。図版は明快で読者の理解を大いに助ける。「いづれのみ真か?」ではなく、「いづれもまた真」でもなく。ひとつに結び合わされ、初めて見えてくる聖書の原風景!

D・ラングバーク 前島常郎訳 権威とその乱用

四六判・二八八頁・一九八〇円

パウハラ・セクハラとキリスト教会



「信仰を守りたいなら、黙っていないさ!」
神にふさわしくないことを行い、神の名を守るために組織ぐるみで一致して隠蔽を謀る...権威の乱用によって傷つき遺棄された信仰者を再び立ち上げさせる書!

D・ワトソン&P・ワトソン 訳者・松村隆/監修・福田崇

A5判変型・三〇四頁・一九八〇円

全信徒祭司の教会を建てあげる

全信徒が弟子、イエス運動の担い手。今までの宣教論を覆す大宣教命令親書。生活のすべての場所で聖霊の働きに拠りながら、できる限り非宗教的であろうと努力する。

山口雅弘 ガリヤに生きたイエスの「共食と共生」 「生きる」をいつくしむ

鋭意編集集中!
イエスによる「神の国運動」、その中心は「共に食し、共に生きること」!



「キリスト教の原点」であるイエスの生き方を現代に回復することこそ急務「平和」を求める全ての人々に贈る力作! 第二弾!
新書判・二八〇頁・一六五〇円
既刊 ガリヤに生きたイエス
新書判・三二八頁・一六五〇円

I 物語集 金子晴勇キリスト教思想史の例話集 全6巻

新書判・三四四頁・一五四〇円



キリスト教思想史を学ぶすべての人に、あたかも絵画を観るように理解できる例話集成!
第2巻 命題集 近日発売!
新書判・三二〇頁・一五四〇円

金子晴勇責任編集 ドイツ敬虔主義

著作集 全10巻 四六判上製

- 第1巻 シュベナー「敬虔なる願望」佐藤寛史 金子晴勇訳
- 第2巻 シュベナー「新しい人間」山下和也訳 最新刊・四〇〇頁・三〇八〇円
- 第3巻 シュベナー「再生」金子晴勇訳
- 第4巻 フランケ「回心の開始と継続」菱刈晃夫訳 第四回配本予定
- 第5巻 ツェンゲル「フリーモン」と歩んだ道と言葉 若松功一訳
- 第6巻 ツェンゲン・ドーフ「福音的真理」金子晴勇訳 第三回配本予定
- 第7巻 エーティンガー「自伝」喜多村得也訳 第五回配本予定
- 第8巻 エーティンガー「聖なる哲学」喜多村得也訳 二八八頁・三〇〇円
- 第9巻 テルステーゲン「真理の道」金子晴勇訳
- 第10巻 ドイツ敬虔主義の研究

画期的著作集 話題!

書店名	郵便番号	住 所	電 話	フ ァ ッ ク ス	U R L	メ ー ル	郵便振替
北海道キリスト教書店	060-0807	札幌市北区北七条西6丁目	011-737-1721	011-747-5979	http://www.jb-shop.com	sasaki@jb-shop.com	02770-2-56520
善隣館書店	020-0025	盛岡市大沢川原3-2-37	019-654-1216	共用		zenritkan_syoten_0530@yahoo.co.jp	02350-0-874
エッセイの木	980-0012	仙台市青葉区錦町1-13-6 エマオ1F	022-223-2736	022-302-6678	https://sendaibcs.uccj.jp/	info@sendaibcs.uccj.jp	02230-0-31152
恵泉書房	260-0021	千葉市中央区新館2-2 千葉カリアセンタービル	043-238-1224	043-247-3072	http://www.keisen.christian.jp	keisen@vestia.ocn.ne.jp	00120-9-43619
教文館	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3561-8448	03-3563-1288	http://www.kyobunkwan.co.jp	xbooks@kyobunkwan.co.jp	00120-2-11357
待晨堂	167-0053	東京都杉並区西荻南3-16-1	03-3333-5778	共用	http://taishindo-books.jimdo.com/	taishindo@jcom.home.ne.jp	00110-8-95827
バイブルハウス青山	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3567-1995	03-3567-4435	http://biblehouse.jp	biblehouse@bible.or.jp	00160-2-18410
東京キリスト教書店	112-0014	文京区駒込1-44-4 崇徳ビル10F(外都専門)	03-3260-5663	03-3260-5637		tokyo@nikkikan.co.jp	00130-3-60976
横浜キリスト教書店	231-0063	横浜市中区花咲町3-96	045-241-3820	045-241-5881	http://www.tyogaku.ne.jp/~tyokanets/index.html	sksch@mva.biglobe.ne.jp	00250-4-2512
清光書店	951-8114	新潟市営所通一番町313	025-229-0656	共用			00560-8-51419
静岡聖文舎	420-0866	静岡市葵区西草深町20-26	054-260-6644	054-260-5612	http://www.s-seibun.co.jp/	info@s-seibun.co.jp	00810-8-26558
名古屋聖文舎	466-0045	名古屋市中区大須1-16 日本キリスト教団熱田区内	052-680-8090	052-680-8091	http://nagoya-seibunsha.la.coccan.jp/	nagoya-seibunsha@nifty.com	00810-5-14073
京都ヨルダン社	602-0854	京都市上京区荒神口通河原町東入ル	075-211-6675	075-211-2834	http://web.kyoto-iret.or.jp/people/kjordan/	kjordan@mbox.kyoto-iret.or.jp	01010-2-594
大阪キリスト教書店	530-0013	大阪市北区茶屋町2-30	06-6377-6026	06-6377-6027	http://osakabcs.web.fc2.com/	ochrbook@river.ocn.ne.jp	00990-3-43009
堺キリスト教書店(聖徳社)	591-8044	大阪府堺市北区长尾町2丁1-18	072-254-2233	共用		sakaixx@outlook.jp	00970-0-172228
神戸キリスト教書店	650-0021	神戸市中央区三宮町3-9-18三陽ビル2F	078-331-7569	078-945-9388		kobex@nikkikan.co.jp	00170-2-421390
広島聖文舎	730-0841	広島市中区舟入町12-7	082-208-0022	082-208-0177		hseibun0951@yahoo.co.jp	01360-4-1958
リバーサイドブックス	779-1105	徳島県阿南市羽ノ浦町古大道路/西13	090-8694-4986	050-3142-3017		ykwbt3@gmail.com	16220-17974891
松山キリスト教書店	790-0804	松山市中一万町1-23	089-921-5519	089-921-5413	http://www.goddes.jp/matsuyama_1007/index.html	sksch@dokidoki.ne.jp	01650-1-2120
新生館	810-0073	福岡市中央区舞鶴2-7-7	092-712-6123	092-781-5484	http://www.sinseikan.jp/	info@sinseikan.jp	01750-5-10932
キリスト教書店/ハレルヤ	862-0971	熊本市大江4-20-23	096-372-3503	共用		k-haleruya@bible.or.jp	00160-2-18410
沖縄キリスト教書店	904-2143	沖縄県沖縄市知花4丁目12-33	098-927-0220	098-938-1102	https://www.okinawacbs.net	info@okinawacbs.net	01790-4-152916

※一般書店関係の方は 日キ販営業部 TEL 03-3260-5670 にご連絡ください。

福音と世界

2025年1月号

特集Ⅱ 絵本から見る多様な世界

寄稿者Ⅱ 佐藤潤一、吉井康文、川辺陽子

藤本朝巳、沢 知恵、吉田 新

書評 キュンク「イエス」(大友浩)、リレー連載「荊冠の神学」を読み直す3(堀江有里)、好評インタビュー連載 女たちの闘い(絹川久子さん)、証言としての旧約聖書(田島卓)、「日本的キリスト教」を読む(山口陽一)、新約釈義ルカ福音書(山崎ランサム和彦 他)

A5判・定価660円・〒70円

定期購読についてはお気軽にご相談下さい。

新教出版社 TEL: 03-3260-6148

Email: sales@shinkyo-pb.com

編集室から



本が読めていない。読みたい本も読まなくてはいけない本もたくさんあるのだが、少し時間が空くとスマホを触っている。このままではいかん、と気合いを入れて手にしたのが『読んではない本について堂々と語る方法』(P・バイヤール著、大浦康介訳/筑摩書房)だ。

出版人としてお叱りを受けそうなタイトルだが、内容は種々の「読んではない」状態の分析から「読む」行為自体を問い直す読書論にもなっていて、予想以上に面白かった。著者によれば、ある本を知るために全ての頁を読む必要はない。深く読み込みすぎると本の全体像を把握できないだけでなく、その本と他の本との関係、また本に対する自己の立場まで見失う。「読まない」ことは本に対して適切

予告

本のひろば

2025年2月号

本・批評と紹介

(巻頭エッセイ) 西岡昌一郎(特集)「聖書の世界観を深めるための聖書考古学この三冊!」山野貴彦(書評)原口尚彰著「メタファーとしての譬え」、川中仁編「宗教と終末論」、川崎公平著「使徒言行録を読もう」、デービッド・ワトソン&ポール・ワトソン著「全信徒祭司の教会を建てあげる」、大井満責任編集「全地に満ちる主の栄光」他

な距離を保ち、その真の意味を見極める行為なのだ——これほど積ん読常習者を勇気づけるテーマがあるだろうか。よし、今度読んではない本の話が出たら、私も堂々と「ああ、あれは〇〇ですよね」と……いや、正直に「読んではせん」と言ったほうが心が楽な気がしてきた。(豊田)

【お詫びと訂正】

前号「本のひろば」12月号に誤植がありました。

14ページ、上段1―2行目の「三十八年間」は、正しくは「四十七年間」です。これは書評者の責任ではなく『岐阜キリスト教史』(教文館)書籍本文の誤りがそのまま書評に引用されたものです。ここに訂正し、お詫びいたします。また今後このようなことがないよう、校正の徹底に努めてまいります。



不安と孤独の処方箋 病の教訓、聖書のヒント

石丸昌彦

2024年12月2日刊行

誰もが抱える不安と孤独にどう向き合うか。クリスチャンの精神科医が心と体のつながり、病から得られるヒントなどを専門的知見から解説。聖書の思索も含めつつ、こころの健康を守るためのヒントを提言する。◆四六判 並製・224頁・定価2,640円

押田成人 遊行の巡礼者

2024年12月16日刊行予定

宮本久雄／石井智恵美 編

信州の八ヶ岳山麓に高森草庵をひらき、祈りと労働、思索の日々を送った押田成人(しげと)神父。病を同伴者として歩んだ生涯と、宗教や民族を超えた人びとの出逢いを通して培われたその思索をたどる。◆四六判 並製・176頁・定価2,200円



押田成人
著作選集
好評発売中

『1 深みとのめぐりあい ―高森草庵の誕生』(オンデマンド版) 定価3,960円

『2 世界の神秘伝承との交わり ―九月会議』 定価2,970円

『3 いのちの流れのひびきあい ―地下流の霊性』 定価2,970円



それでも、希望に生きる 聖書黙想366日

上垣 勝

2024年12月19日刊行予定

テゼ共同体の祈りに学び、その実践に生きる著者による366日の聖書黙想。書斎での聖書読解だけでなく、日々の生活の中で、世界の動きを感じつつ、日毎の糧である聖書の言葉を黙想する。◆A5判 並製・336頁・定価4,400円

12月の新刊（価格表示は税込）



使徒パウロの神学

J・D・G・ダン 著 浅野淳博 訳

「パウロに関する新たな視点」（NPP）の提唱者であり、英国が誇る新約学の世界的権威である著者がパウロのトローリー理解、キリストへのロジスティス、終末の緊張と教会の在り方などの問題に独自のバランス感覚で挑む。

● A5判・上製・976頁・定価6,930円



パウロとパレスチナ・ユダヤ教 宗教様態の比較

E・P・サンダース 著 浅野淳博 訳

ユダヤ教は行為義認の宗教なのか？
そうでなければ、パウロはユダヤ教の何を批判したのか？

現代の聖書学に先鞭をつけた稀代の名著、40周年記念版からの待望の翻訳！

1977年に発行されるや、「義認論」をめぐってキリスト教界を揺るがし、今も大きな衝撃を与え続ける記念碑的著作。「パウロに関する新たな視点」（NPP）を理解する上で不可欠な書。

● A5判・上製・890頁・定価12,100円



アシジの聖フランシスコ伝記資料集

フランシスコ会日本管区 訳・監修

中世最大の聖人に関する最初期の証言を集成した源泉資料集。チラノのトマスによる「生涯」、聖ボナヴェントウラによる「大伝記」「小伝記」、文学作品として名高い「小さき花」など、初の邦訳を含む聖人伝8作品と付録を収録。

● A5判・上製・820頁・定価8,680円



聖ボナヴェントウラ 著作選集

著者選集

フランシスコ会日本管区 監修 小高 毅 編訳

没後750年記念出版！

同時代の盟友トマス・アクィナスと双壁をなす中世スコラ学の巨星が残した霊的・神学的著作を精選して収載。フランシスコ会学派を代表する稀代の思想家の、知的な営みと生の経験の統合を試みた神秘主義的思考を明らかにする。「三様の道」「生命の完成」「フロロクイウム」などの霊的指導書、「生命の樹」「神秘の葡萄の樹」などの観想書のほか、手紙や説教、神学的代表作の「プレヴィロクイウム」を収録。

● A5判・上製・670頁・定価9,680円

教文館

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1
電話 03-3561-5549（出版部直通）〈呈・図書目録〉

キリスト教の書籍やCD、グッズのご注文は（e-shop 教文館）
<http://shop-kyobunkwan.com/> まで！



本のひろば.com



一九五七年七月一七日 第三種郵便物認可
二〇二五年一月一日発行（毎月一回一日発行）
本のひろば 第八〇五号 二〇二五年一月号

発行所 〒112-0014 東京都文京区関口一四四・四一 一般財団法人キリスト教文書センター
電話〇三・三三六・六五二〇 振替〇三・三三六・六五二〇
発行人 金子和人 編集人 村上信児 印刷所 モリモト印刷
発売所 日本キリスト教書販株式会社 電話〇三・三三六・〇一五六七〇

定価七八円（税抜七一円）（〒63円）
一年分二〇〇円（送料共）